

令和五年度 全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会

知事賞

最優秀賞

中央審査

優秀賞(経済産業大臣賞)

「ダム湖に沈む村」

松山市立南第二中学校 三年

まつだいら さだひさ
松平 定久

私の祖父が建てた旧伊予三島市の家は、銅山川のほとりにひっそりと建っている。そこは、奥の院泉龍寺を通り過ぎ、細い山道を進み、金砂湖を渡り、中の川へ入った所にある。家族と春休みに訪れた際、澄んだ青緑色の金砂湖を想像して望むと、今まで見た事のない水位で、底が干あがるほどとなっていた。建物や道路の基礎と思われる跡を見つけ、父がダム湖に水没した村の話をしてくれた事を思い出した。私は、この広大な自然にそびえ立つ銅山川のダムにより、どのような水資源開発が行われていたのか知りたいと思った。

銅山川疎水は、「四国三郎」と呼ばれる吉野川上流の銅山川からトンネルを貫き、四国中央市に農業用水を供給している。水源不足による度かさなる干ばつのため、流域変更による分水を求め、下流の徳島県との調整や、ダムにより水没する村との交渉など幾多の困難を乗り越え現在では、発電や工業、飲料水に利用され全国屈指の製紙産業や都市の発展を支えていることが分かった。そして、私が水切り石で遊ぶ銅山川は、雲母を含む石が多く、日光が当たると川がきらきらして見え、その用水は「黄金の水」とも言われ、金砂村には「史跡、砂金採取跡の碑」が建てられている。

私は、自分が今までまばゆい沿岸に建つ立派な煙突を見て、誇らしい気持ちを感じていたが、その発展する産業の陰には、水没する村があったと思うと切ない気持ちとなった。そして、その水資源の開発は、村を水没させるだけではなく小学校が廃校になるなど、村が過疎化するきっかけとなったと考えるようになった。また、平成の大合併で、山間部にある農山村主体の自治体が、平地部の都市と合併することで

過疎化が進行するという、典型的な例も相まってへき地となったことが分かった。実際、雨戸の閉まった商店やブラックバスの船着き所を通る度に、祖母や父が昔利用した時の事を懐かしそうに話し、閉鎖して残念そうにしていた。また、日暮れ時には、民家の灯りを探し、村民の生活を感じると何処かほっとした感じであった。私は、過疎化が止められなくても、関わる人として、集落の生活やダム湖の水位を心配するなど、関心を持ち続ける事が大切であると思った。また、近年近隣の中学校ではその昔農閑期の副業として砂金採りが行われていたことなど、ふるさとの歴史を知り、触れ合うことを目的として、銅山川で砂金採り体験が行われている。私は、輝かしい産業だけに注目するのではなく、その産業の基礎を成した銅山川やダムについて学習し、当時の人が未来に架けた思いを理解する事が大事であると思った。

三島の家には、中の川温泉を引いており、祖母は訪れる度に入浴を楽しみにしている。川の水を引いていることもあり、水道代が無料の温泉である。しかし、川の恩恵には土や落ち葉が含まれ、水道管を詰まらせ、お風呂や台所での給水が困難な時もある。祖母は、自宅からペットボトルに飲料用水を何本も用意し、父は、寒い日も日暮れでも、文句を言うことなく、手慣れた感じで工具を持ち、外の水道管のゴミを取り除き、温かいお風呂を沸かしてくれる。私は、そんな家族の姿をみて、川の恩恵を受けるといのは、便利に改良するのではなく、川を理解し、手をかける事もいとわず、共生する姿勢が大切なのではないかと思った。

現在、銅山川3大ダムの貯水状況は平年を下回り、渇水対策が継続して行われている。瀬戸内海気候による降水の少なさは、今も変わらず人々を悩ませている。私達は、先人達が未来に託した思いを胸に、台風や気候に頼るだけでなく、水と共生する社会を私達の子孫のためには自分達が考え続けなければならない。祖母がいつまでも温かいお風呂に入れるように銅山川と共生していきたい。